

昨年度の4月から福島民友新聞「隨想」の執筆陣の一員となった。月に一度のペースでエッセイを掲載させていただいている。それを読んでくださっているある方が、この「園長通信」も読んでくださるようになった。『人生は、燐燐と 校長室だより100選』も読んでくださっている。その方は、仕事が終わり、夜寝る前の時間に私の文章を読んでいるのだという。それも、同じ文章を何度も読んでいるそうである。その度に、感じるものが違う、味わいが変わるのでそうだ。いっぱいヒントが入っており、人生の楽しみ方、捉え方が変わったとのことである。楽しみが増えたとのことだった。実にありがたい話である。と同時に、これは責任重大だと感じるようになってきた。

ずっと何年も文章を綴ってきた。意識してきたものがあるとすれば、「読後感」だろうか。読んだ後に、読者の方にはどんなものが残るか。前述のような読者の話を聞いていると、読後感から一步進めて「多幸感」というものを考えるようになってきた。自分としては、自らハードルを上げることとなった。

多幸感、こんなことを考えるようになった途端に、プレッシャーが襲ってきたのだろうか。文章が出てこなくなってしまった。創作意欲はあるのだが、文章が浮かんでこない。困った。やはりアマチュアの自分はこんなものなのか。

数日が経過した。家人からこんな話を聞いた。今まで教育界の要職を歴任し、今年度の4月から福島市内の学校で校長職に就いた方がいる。私は、一度お会いしたことがあった。その方が、実は「校長室だより～燐燐～」の読者だったというのである。すべて読んでいるそうである。今までそうなのだが、私の知らないところで、たくさんの方々が私の文章を読んでくださっている。そう考えると力が湧き上がってくる。その方は、家人に「ファンです」と言ってくださったそうである。

その翌日、家に帰ると、ポストに白い縦長の封筒が入っていた。宛名は、手書きの文字だった。今では、このようなお手紙をいただく機会は滅多になくなってしまった。新鮮だった。差出人のお名前を見て、すぐにわかった。福島民友新聞「隨想」で私の文章を読み、隨想欄のすぐ隣にある投稿欄「窓」に文章を寄せてくださった方だった。

封書には、こんな文面があった。

この度『人生は、燐燐と』を読ませていただきました。正直初めは、教育論ばかり書かれてある少しお堅い本なのかと思いましたが、エッセイのような形式で、とても読みやすく、仕事から帰ってきて、ふと家で読んでいると、心温まる内容があり、心のやすらぎを感じました。（中略）

この度は、あまりに良い本と出会えたことに、うれしく思い、ペンを取らせていただきました。

これは、もしかしたら多幸感なのかもしれない。人生、起こることにはすべて意味があるという。このタイミングで、こんな展開になるとは。偶然ではないだろう。何だか叱咤激励されているような気がしてきた。背中を押されているように感じる。やっぱり、読後感できれば多幸感を意識しながら、背伸びをせず、等身大の文章を書いていこうと思う。それが、最も自分らしい。